『初会金剛頂経』所説のマンダラ（後）

乾　　仁志

本稿は本誌の前号に発表した論文の続きである。今回は［B－2］降三世品の教勅マンダラ、および［C］遍調伏品と［D］一切義成就品のマンダラについて考察する。[1]

Ⅲ．マンダラの形態と諸尊の構成概要

［B－2］降三世品の教勅マンダラ

降三世品の教勅マンダラは、大・三昧耶・法・羯磨という四種の様式にしたがって説かれているが、[2] マンダラの形態は他のマンダラと異なる。本経では三世輪あるいは一切金剛部マンダラと呼ばれている。三世輪とは大自在天を頂点とする外金剛部の五類諸天ならびにそれらの妃を指したものである。[3] 一切金剛部とは世間と出世間を含んでいる。[4] それゆえマンダラの諸尊は、先に取り扱った［B－1］降三世品のマンダラとも共通するところがある。ただし降三世品のマンダラが出世間の金剛部の諸尊を中心に画かれるのに対し、教勅マンダラでは世間の外金剛部の諸天も主要な位置に配置される。なお教勅マンダラは、『十八会指帰』に指摘されているように、仏頂尊系のマンダラという性格をもつ。[5]

(1)　大マンダラ（三世輪・大マンダラ）

1）・「さてここで最上の〈大マンダラ〉を説明しよう。

2）・法輪（dharmacakra）のように、すべてのマンダラを線引きしなさい。

（抨線の真言あり。）

マンダラの中央にカディラ木の橛（khadhirakīlaka）を打ち込み、

つぎに線を二倍（dviguṇa）にして、それによって線引きしなさい。

（橛の真言あり。）

四本の線を結んで、輪（cakra）のマンダラを線引きしなさい。

・その［輪の］外側に出て、また同様に二倍（dviguṇa）［にして線引きしなさい］。

・またその三倍（triguṇa）にして外輪（bāhyamaṇḍala）の線引きをなしなさい。

・隅の方（vidiśā）はスポーク（輻　ara）にする方法で、隅の線（koṇarekhā）を線引きしなさい。

（染色の説明と真言、開門の説明と真言あり。）

3）• 金（sauvarṇa）または銀（rājata）の、あるいは彩色した土製（mṛnmaya）の四角の祭壇（iṣṭaka）に仏の影像（buddhabimba）を入れなさい。

（一切仏の真言あり。sarvavit）

仏の一切処（四方）に四の大薩埵をなしなさい、

金剛手（vajrapāṇi）は降三世［の相］（trilokavijaya）をなしつつ前方に住する。

（金剛手等四尊の真言あり。）

（金剛歩の説明と真言あり。）

• 金剛歩によって、同様に第二のマンダラ［の第一のマンダラ］[6]に進み、

如法に金剛幻化（vajramāya）等を順に画きなさい。

（金剛幻化等四尊の真言あり。）

そして金剛歩によって、同様に第二のマンダラに進み、

金剛クンダリ（vajrakuṇḍali）等の諸の金剛忿怒（vajrakrodha）を入れなさい。

（金剛クンダリ等四尊の真言あり。）

つぎに金剛歩によって、四門に［進み］画きなさい、

如法に金剛シャウンダ（vajraśaunda）等のすべてを順に。

（金剛シャウンダ等四尊の真言あり。）

そして金剛歩によって、第三のマンダラに進み、画きなさい、

如法に金剛ムサラ（vajramusala）等を一緒に順に。

（金剛ムサラ等四尊の真言あり。）

そして金剛歩によって、第四マンダラに進み、画きなさい、

如法に金剛鉤（vajrāṅkuśa）などの諸の召使（ceṭa）を順に。

（金剛鉤等四尊の真言あり。）

• 金剛歩によって、外輪のところに進み、

如法にすべての母天（mātṛ）を順に画きなさい。」

• すべて（四方）の金剛門にかの諸の門衛を［画きなさい］。」（以上§§1262～1290）

1）マンダラの名称

様式の「大マンダラ」は主として大印すなわち尊形によって表されていることによる。偈文にはマンダラの固有名は説かれていない。このことは以下の三種の教勅マンダラでも同じである。ただし偈文に先だって「一切金剛部の大マンダラ」（§1261）とあり、また入壇作法ならびに儀軌名には「三世輪の大マンダラ」（§§1291，1331）と記され、マンダラの性格が示されている。四大品の他のマンダラでは一部に例外もあるが、図絵マンダラを説明する偈文に様式名とともに固有名が説かれている[7]。また他のマンダラでは、「金剛界のようであり」という定型句も付加されているが、教勅マンダラには存在しな

い。このことは他のマンダラと形態ならびに諸尊の構成が異なることを示唆している。[8)]

2）マンダラの形態

大マンダラの基本的な形態は、「法輪のように」（dharmacakrapratikāśa）とあるように法輪形になる。[9)] 抨線儀軌（墨打法　sūtraṇavidhi）では（§§1263～1267）、最初に抨線の心真言が説かれているが、降三世大マンダラのもの（§851）と少し異なる。つづいて橛を打つ作法と心真言ならびに抨線の作法が述べられ、法輪形の具体的な形態が明らかにされている。

ここではマンダラの中央に打ち込んだ橛（kīlaka）を中心に、内側から同心円状に三重の「輪のマンダラ」（cakramaṇḍala）が画かれる。このうち三番目に画かれる一番外側にある輪が外輪（bāhyamaṇḍala）となる。門については、本文3）の諸尊の配置を説明した中に、第二番目の輪に「四門」（§1283）があり、また外輪に対応して「すべての金剛門」（§1290）とあるから、四方に門が存在する。そして法輪形の特徴として、四隅にはスポーク（輻）の形に隅の線（koṇarekhā）が引かれる。なお抨線儀軌の橛を打つ作法は降三世大マンダラには説かれていない。[10)]

次に抨線の染色と開門の説明文がある（§§1268～1271）。説明文と心真言は、降三世大マンダラのもの（§§855～858）と少し異なったところもあるが、内容はほぼ同じである。

3）マンダラ諸尊の配置

教勅マンダラの諸尊の構成は前の降三世品のマンダラと少し異なる。出生段では、世尊毘盧遮那如来、金剛手等の四転輪者、金剛最上明（大自在天）、さらに幻化金剛等の外金剛部の二十天、四摂が確認できる（§§1223～1260）。

図絵マンダラでは、マンダラの初重の中央に、降三世大マンダラと同様に四角形の祭壇が設けられ、そこに仏の影像（仏形）が配置される。心真言は一切仏とあるが（§1272）、基本的には毘盧遮那如来である。[11)] 仏の四方には四大薩埵を配置する。前方は降三世尊である忿怒の金剛手（金剛吽迦羅）である。その他は心真言によれば、金剛顰眉忿怒、金剛見忿怒、金剛種々忿怒とあるが、これらは出生段に見える四転輪者に対応し、降三世大マンダラで言えば四仏の位置にある尊格に相当する。このうち忿怒の金剛手は出生段で仏頂尊の性格が与えられている。[12)]

次に金剛歩の作法ならびに心真言が説かれている（§§1277，1278）。このうち心真言については、ほぼ同様のものが降三世大マンダラにも説かれている（§864）。

次にマンダラの第二重に、以下金剛幻化等の外金剛部の五類諸天が配置される。[13)]

第一のマンダラ……金剛幻化（nārāyaṇa）等の三界主（四明王）

第二のマンダラ……金剛クンダリ（amṛtakuṇḍali）等の飛行天（四忿怒）

四門……金剛シャウンダ（madhumatta）等の虚空天（四ガナ主）

第三のマンダラ……金剛ムサラ（kośapāla）等の地居天（四使者）

第四のマンダラ……金剛鉤（varāha）等の地下天（四召使）

三界主以下の四類はグループ別に四方に、また虚空天はそれぞれ四門に分散して配置される。また四隅にはスポークの形に線が引かれるから、それが四方の境界になる。それゆえ右繞の法則にしたがって、金剛シャウンダが配置される東門のある東方部を金剛幻化等の第一のマンダラとし、以下南門のある南方部を第二のマンダラ、西門のある西方部を第三のマンダラ、北門のある北方部を第四のマンダラと見ることができるであろう[14]。

なお三界主はここでは「金剛幻化等」とあるから、大自在天は第二重に配置されない。出生段では、忿怒の金剛手の足下で死滅した大自在天の意識が、一切如来によって再びこの世に蘇生せられ、さらに金剛手の挙足によって金剛手の足下から身体も解放される。そして大自在天は一切如来から金剛戟（vajraśūla）を与えられて、金剛最上明（vajravidyottama）という金剛名の灌頂を受け、そこで舞の供養を行うと述べられている（§§1206～1222）。それゆえ大自在天は金剛手の傍らに住するとも考えられるが、このことは図絵マンダラの文からは確認できない。図絵マンダラでは「降三世［の相］をなしつつ」とあるから、やはり大自在天（ならびに烏摩妃）は初重の金剛手の足下に存在すると考えてよいであろう[15]。

次にマンダラの第三重すなわち外輪には、すべての母天（女神）が配置される。烏摩妃を除く五類諸天妃で、第二重の五類諸天と同じ方位に位置すると推測される。それゆえ虚空天の四天妃のみはそれぞれ東南西北の各部に分かれることになる。

次にすべての金剛門に諸の門衛が配置される。この場合の金剛門とは、外輪すなわち第三重の四門と判断される。また門衛（dvārapāla）とあるから、四門衛すなわち四摂である。四摂の存在は出生段の真言によって確認できる（§§1257～1260）。なお次項の三昧耶マンダラでは金剛シャウンダ等は門護（dvāraraksaka）とあるから、第二重の門は虚空天が守護者になっている。

(2)　金剛マンダラ（一切金剛部・金剛マンダラ）

1）•「さてここで最上の〈金剛マンダラ〉を説明しよう。

2）•四角形にして、北門のある外輪を線引きしなさい。
その［外輪の］内側のところには、また同様に東門［のあるマンダラ］を。

3）•その中央に規程通り仏の影像（buddhabimba）を入れなさい。
その［仏の］一切処（四方）に降三世（trilokavijayā）等の四［印］を。
•同様にマンダラの勝れたところに諸の金剛印（vajramudrā）を画きなさい。

それら［金剛印］の一切方に部族の印を画きなさい。

- そして金剛シャウンダ（vajraśaunda）等の四の門護（dvārarakṣaka）を［画きなさい］。
- ビーマー（bhīmā）と、シュリー（śrī）と、サラスヴァティー（sarasvatī）と、ドゥルガー（durgā）を左の諸隅に（四隅）［画きなさい］。
- 外［輪］の［四］隅にこれら［四天女］の印を画きなさい。

［外輪のところにはすべての天女（devi）を画きなさい。］」（以上§§1350～1355）

1）マンダラの名称

様式を示す「金剛マンダラ」とは金剛界品等と同様、三昧耶マンダラであることを示している。ただし固有名は前述したように明記されていない。図絵マンダラを説明する偈文に先立つ文、ならびに儀軌名には「一切金剛部の金剛マンダラ」（§§1349，1373）とある。

2）マンダラの形態

マンダラの形態は大マンダラと異なり、四角形が基本になる。外輪には北門（uttaradvāra）が配される。また内側も外輪と同じように四角形になると判断されるが、ここでは東門（pūrvadvāra）が配される。このように少なくとも二重の同心方状に画かれ、また門は四方にはなく、内側と外側で方位を異にして一方にのみ形成される。

3）マンダラ諸尊の配置

マンダラ諸尊の構成は大マンダラと一部相違する箇所も見られる。出生段では、世尊、金剛手等の四転輪者、金剛最上明（大自在天）、金剛幻化等の外金剛部の二十天が確認できる（§§1333～1348）。大マンダラに比較すると、四摂が欠けている。

図絵マンダラでは、内側のマンダラの中央に仏の影像（仏形）が配置される。前の降三世品の三昧耶マンダラと同様、大印すなわち尊形である。その仏の四方に降三世尊である忿怒の金剛手等の四印が配置される。[16]

次にマンダラの勝れたところに諸の金剛印（vajramudrā）が画かれる。「マンダラの勝れたところに」（maṇḍalasya agreṣu）とは明らかでないが、前述の仏および四大薩埵の四印のさらに外側の四方にそれぞれ金剛杵の印が画かれると考える。[17] そしてそれら各金剛杵の周囲に部族の諸印が画かれる。ここでは大マンダラと同様、金剛幻化等の三界主以下の四類の印をグループ別に各金剛杵の周囲に配置する。[18] 金剛シャウンダ等の虚空天は門護（門の守護者）とあるから門に配置される。ただし金剛シャウンダ等は印となっていないので、尊形である可能性がある。[19] 出生段では何れも三昧耶印とあり、真言も印に対応して仏以下すべて女性形である（§§1333～1348）。

次にビーマー（bhīmā）等の四天女が配置される。左の隅というのは、金剛界の八供養の出生段に見られたように、四方から中心に向かって左側になる四隅を意味する。す

なわち先に四方に配置されたそれぞれの部族の印の左にということである。したがって内側の四角形の四隅にそれぞれ配されると考える。

次に本文では、外輪の四隅にこれら四天女の印が画かれる。この文は前文につながっているようにも解釈できるが、前文では「左の隅」とあり、ここでは「外側の隅」とあり、一応分けて説明されているので別文として理解した。その場合、前文の四天女は尊形の可能性がある[20]。なお四天女の存在は大マンダラ等には説かれていない[21]。

次に外輪にはすべての天女（諸天妃 devī）が画かれる。この文は、チベット訳と漢訳によって補われたものである。ただしサンスクリット写本にはなく、またŚākyamitraも言及していない。天女（devī）とあるが、Ānandagarbha は本文を引用するものの、三界主、飛行天、地居天、地下天を四方に画くとしている[22]。

なお、図絵マンダラには、金剛最上明については述べられていない。大マンダラと同様、金剛手に付属すると考えてよいであろう[23]。

(3) 大三昧耶マンダラ（一切金剛部・法三昧耶マンダラ）

1）•「さてここで最上の〈大マンダラ〉[24]を説明しよう。

2）•三世輪のように、すべてのマンダラを画きなさい。

3）•そして仏と持金剛等はすべて［三摩地に］入っている。

法マンダラの方法で、胸のところで標幟を画きなさい。」（以上§§1387, 1388）

1）マンダラの名称

金剛界品、降三世品では同種のマンダラは「法マンダラ」とあり、遍調伏品、一切義成就品では「智マンダラ」とある。ここでは一応サンスクリット写本どおりに読んだ。ただしこの場合の「大マンダラ」は、四種マンダラでいう大マンダラではなく法マンダラである。他には一印マンダラの様式名にも採用されている用例があるが（§§600, 2124）、それは各大マンダラの様式で主尊（転輪者）のみを画いたものであるから共通する。法マンダラの場合は様式が異なるので、これと同列に扱えないが、一応大印すなわち尊形のマンダラであるということでは共通する。上記の本文の3）には法マンダラであることが述べられているが、さらに図絵マンダラを説明する偈文に先立つ文、ならびに儀軌名には「一切金剛部の法三昧耶マンダラ」（§§1386, 1401）とある。

2）マンダラの形態

マンダラの形態は「三世輪のように」とある。「三世輪の大マンダラ」という用例があるように（§§1291, 1331）、大マンダラを指すと考えられる。それゆえマンダラの形態は大マンダラと同じく法輪形であり、多重の同心円状に画かれると見るべきである[25]。

3）マンダラ諸尊の配置

マンダラ諸尊の配置に関する記述はきわめて簡略である。出生段では、世尊、金剛手

等の四転輪者、金剛最上明（大自在天）、幻化金剛等の外金剛部の二十天が確認できる（§§1333～1348）。大マンダラに比較すると、ここでも四摂が欠けている。

図絵マンダラでは、仏と持金剛等とのみあるだけで、詳しいことは分からない。Ānandagarbha の註釈では出生段に見える諸尊に四摂が加えられている。[26]

なお図像上の特色として、諸尊は禅定に入り、胸のところに標幟を画くとある。法マンダラの方法で、とあるから他の同種のマンダラと同じ特色をもつことが分かる。

(4)　羯磨マンダラ（一切金剛部・羯磨マンダラ）

1）・「さてここで最上の〈羯磨マンダラ〉を説明しよう。

2）・金剛マンダラの方法で、すべてのマンダラを線引きしなさい。

3）・すべての最勝マンダラは仏が中央に住する。
それらの周囲に諸の大薩埵（mahāsattva）をならべて入れなさい。

・その中に妻（patnī）をともなう金剛最上明（vajravidyottama）自身を［画き］、
金剛嬉（vajralāsyā）等の秘密舞供養によって敬礼せしめなさい。

・ここに諸の天女（devi）を順に輪のマンダラの方法で、
それぞれの印と反対の印をもって舞しつつあるように画きなさい、
仏と持金剛を供養するために、金剛舞の方法で。

・諸隅と諸門のところに順に香（dhūpā）等を［画きなさい］。」（以上§§1439～1444）

1）マンダラの名称

様式の「羯磨マンダラ」は諸尊の活動としての供養を象徴したマンダラであることを示している。図絵マンダラを説明する偈文に先立つ文、ならびに儀軌名には「一切金剛部の羯磨マンダラ」（§§1438，1455）とある。

2）マンダラの形態

マンダラの形態は「金剛マンダラの方法で」とあるから、三昧耶マンダラと同じく四角形であり、多重の同心方状に画かれると考えられる。[27]

3）マンダラ諸尊の配置

マンダラの諸尊の配置は上記の三マンダラと比べてやや趣も異なる。出生段では、世尊、金剛手等の四転輪者、金剛最上明（大自在天）、金剛忿怒金剛火大天女（烏摩妃）、さらに金剛金色大天女（金剛幻化妃）等の二十天妃が確認できる（§§1403～1437）。大マンダラに比較すると、四摂が欠けているが、ここでは五類諸天妃が現れるのが特色である。

図絵マンダラでは、まず仏を中心に大薩埵を伴ったすべてのマンダラが配置される。注釈ではこれを外輪の四方に配置する。また四仏が金剛吽迦羅（金剛手）等の姿で住するのであるとし、それらの左右の両側に二尊づつ四忿怒あるいは四菩薩を配している。[28]

次にこれらの内側の中央に金剛最上明（大自在天）と烏摩妃を配し、その四隅に金剛嬉女等の秘密舞供養を配する。[29] 出生段には四内供養は現れないが、金剛手等の四転輪者（四大薩埵）の真言がこれら四内供養に対応している（§§1406～1409）。

次に金剛最上明と烏摩妃ならびに四内供養を取り囲むように諸の天女が画かれる。すなわち金剛金色大天女等の諸天妃（四類？）である。

次にマンダラの四隅と諸門に香女等を配置する。四隅には香女等の四外供養を配置すると見られるが、諸門については明らかでない。三昧耶マンダラのように内側は東門、外側は北門とするならば、虚空天（あるいは虚空天妃）を分けて配置すると考えるべきであろう。ただし四摂を配する説もある。[30]

なお図像上の特色として、四内供養は秘密舞供養、諸天妃は金剛舞の方法でとあるように、舞のしぐさによって供養を表わす点があげられる。金剛界品では諸尊（女尊）は両手に三昧耶形を捧げるが、教勅マンダラでは舞のしぐさになる。したがって先に述べた降三世品の羯磨マンダラも金剛界品とは異なるであろう。[31]

以上、降三世品の四種の教勅マンダラについて概観した。ここで上記のマンダラの特色についていったん整理しておきたい。

(1)　マンダラの形態の基本は大マンダラでは法輪形であり、三昧耶マンダラでは四角形である。大マンダラには四門があり、四隅にはスポーク（輻）がある。三昧耶マンダラには四門はなく、外輪に北門、内側に東門を持つ。法マンダラは大マンダラと共通し、羯磨マンダラも三昧耶マンダラと同様であると考えられる。このように教勅マンダラは他のマンダラに比べて著しい相違をもつ。これは仏頂尊系のマンダラであること、ならびにヒンドゥー教の神々が主要な礼拝対象になっていることと関係しよう。

(2)　教勅マンダラの諸尊の構成は、大マンダラでは、仏、四大薩埵、金剛最上明、烏摩妃、金剛幻化等の五類諸天、諸天妃、四摂からなる。三昧耶マンダラでは、仏、四大薩埵印、金剛最上明印、四金剛印、金剛幻化等の四類諸天印、四虚空天、四天女、四天女印、諸天妃（あるいは四類諸天？）からなる。法マンダラでは仏、四大薩埵、金剛最上明、幻化金剛等の五類諸天、四摂（？）からなる。羯磨マンダラでは、金剛最上明、烏摩妃、四内供養、諸天妃（四類？）、四大薩埵、十六忿怒、四外供養、四虚空天（四虚空天妃あるいは四摂？）からなる。このうち三昧耶マンダラでは四天女が新たに付加されていること、また羯磨マンダラでは主として女神によって構成され、金剛最上明と烏摩妃が中尊の位置に置かれるのが特色である。

(3)　これらのマンダラ諸尊の記述順は、基本的にはマンダラの内側から外に向かっていくが、羯磨マンダラのみ外輪の四方に四大薩埵と十六尊が配置されることから、

他とは異なる。何れにしても、出世間の主要な諸尊を最初に画くのが基本になっている。

(4)　四仏の名は教勅マンダラでも現れない。代わって四転輪者（四大薩埵）が現れる。

(5)　諸尊の画き方は、基本的に降三世品のマンダラと共通する要素をもつと推測される。その特色は大マンダラでは尊形になる。三昧耶マンダラは仏が尊形であるほか、他は主として三昧耶形であるが、一部尊形も認められる。法マンダラは尊形であるが、大マンダラと異なり、三摩地に住して胸に標幟を持つ。羯磨マンダラは尊形であるが、舞いのしぐさによって供養の行為が表現される。

［C－1］遍調伏品のマンダラ

遍調伏品に現れる諸尊は、部族で言えば蓮華部に所属する。それゆえ遍調伏品のマンダラは蓮華部のマンダラといってもよいであろう。遍調伏品では遍調伏尊である観自在菩薩をはじめとする変化観音によって組織されているのが特色である。これら蓮華部のマンダラとして、ここには大・三昧耶・法・羯磨・四印・一印の六種マンダラが説かれている。以下、各図絵マンダラの偈文について確認したい。

(1)　一切世間調伏（＝遍調伏）・大マンダラ

1）・「さてここで最上の〈大マンダラ〉を説明しよう。
　　金剛界のようであり、〈世間調伏〉と称される。

2）・四角形にして、四門あり、四つのトーラナで飾られ、
　　四本の線で結ばれ、繒帛と華鬘で飾られる。
　　すべてのマンダラの隅（四隅）と門扉のところに、
　　金剛宝をちりばめて、外輪を線引きしなさい。
　・その［外輪の］内側に四角形の線をめぐらしなさい。
　　門［に向いたその］第二の［四角形の］隅を蓮華の相に調えなさい。
　　八柱の方法で、八葉（aṣṭadala）の蓮華を画きなさい。

3）・その花蘂（keśara）の中に仏の影像（buddhabimba）を入れなさい。
　　（仏を召入する真言あり。）
　　仏の一切処（四方）に蓮華の中に住するよう画きなさい、
　　同様に金剛と宝と、また同様に蓮華と種々蓮華を。
　　（これらの真言あり。）
　・金剛歩によって、世間調伏（jagadvinaya）マンダラに進み、
　　そこにあらゆる姿（sarvarūpa）を放射する世自在（lokeśvara）をつくりなさい。

その一切方（四方）に金剛慢等の方法で、
蓮華の標幟をもつ仏等の諸の大薩埵を画きなさい。
（東方五尊の真言あり。）

- そして同様に、金剛歩によって、第二のマンダラに進み、
その中央に頂髻の中（jaṭāmadhya）に如来（tathāgata）を画きなさい。
その一切方（四方）に顰眉等の方法で、
蓮華の標幟をもつものたちを如法に順に画きなさい。
（南方五尊の真言あり。）
- そして金剛歩によって、第三のマンダラに進み、
蓮華に住して［三摩地に］入った（samāpanna）大薩埵を画きなさい。
その一切方（四方）に如法に順に、
蓮華光明等の方法で、諸の大薩埵を入れなさい。
（西方五尊の真言あり。）
- そして金剛歩によって、第四のマンダラに進み、
そこに蓮華戟（padmaśūla）を持つ四面の蓮華（caturvaktra）を画きなさい。
その一切方（四方）に金剛舞などの方法で、
蓮華の標幟をもつ諸の大薩埵を儀軌通りに画きなさい。
（北方五尊の真言あり。）
- そして金剛歩によって、一切隅（四隅）に進み、画きなさい、
金剛嬉等の方法で、蓮華嬉（padmalāsyā）等の女尊（devatā）を。
（四内供養の真言あり。）
- 金剛歩によって、外輪のところに進み、
蓮華香（padmadhūpā）等の四の供養天女（pūjādevī）を画きなさい。
（四外供養の真言あり。）
- つぎに四の蓮華門にガナ（gaṇa）等のすべてを、
それらの心真言の義によって如法に画きなさい。
（四摂の真言あり。）」（§§1503～1537）

1）マンダラの名称

様式の「大マンダラ」は大印すなわち尊形によって表わされることによる。「金剛界のようであり」というのは、このマンダラもスメール山頂で展開された金剛界如来のマンダラに基づくものであり、それと相似なるものであるからである。固有名の「世間調伏」（jagadvinaya）とはこのマンダラの性格を示すものであるが、遍調伏尊である観自在菩薩を中心とするマンダラであることを表明している。マンダラ名としては、本文や儀軌名に「一切世間調伏（＝遍調伏）」（§§1502, 1538, 1612）とあるから「一切」（sakala/sarva）

が省略されているものと考えられる。

2）マンダラの形態

マンダラの形態は大マンダラが基本となる。それゆえ具体的な記述がある。前半の文はマンダラの外輪の説明である。金剛界大マンダラ、降三世大マンダラとほぼ同文であり、内容も同じである。

後半の文は外輪の内側の説明である。マンダラの内側には四角形の線が引かれる。さらに第二の四角形の線は隅が外輪の門に面するように画かれる。そして四角形の四隅は蓮華の相（蓮弁）に整えられ、八柱と同様の意趣で、八葉蓮華のように画かれる。「五つのマンダラ（五輪壇）」という語は見えないが、省略されているものと推測される。

3）マンダラ諸尊の配置

マンダラ諸尊の位置関係は金剛界大マンダラから予想される。ただし降三世大マンダラと同様に、中央から東・南・西・北の輪壇に進み、四内供養、四外供養、四摂の順で配置される。尊格は異なるが、基本的には金剛界三十七尊と同様の諸尊によって構成される。出生段には世尊と金剛手等の四転輪者が現れ[32]、さらに観自在菩薩の心から諸多の変化観音が出現するが(§§1493～1501)、個々の諸尊については詳しく述べられていない。

図絵マンダラでは、マンダラの中央に仏の影像（仏形）を配置する（§1507）。基本的には毘盧遮那如来である[33]。ここでは八葉蓮華の中心になる花蘂（keśara）の中に置かれるのが特色である。仏の四方には四波羅蜜に相当する四種の三昧耶形がそれぞれ蓮華の中に（padmamadhya）画かれる[34]。

四方の輪壇（四方の蓮弁）のうち、最初の輪壇（東方の蓮弁）の中央には遍調伏尊である世自在、第二の輪壇（南方の蓮弁）の中央には頂髻の中に如来を有する尊、第三の輪壇（西方の蓮弁）の中央には禅定に入った大薩埵、第四の輪壇（北方の蓮弁）の中央には四面の蓮華尊が位置する。そしてその周囲にはそれぞれ四尊ずつ変化観音が画かれる。このように四方の四仏の位置にも、金剛界の四仏ではなく、蓮華部の性格をもつ尊格が配置される。これら四大薩埵の尊容の特色は上記のとおりである。またその周囲に配置される十六の変化観音はいずれも蓮華の標幟（padmacihna）を持ち、東方の四尊は金剛慢等の方法で、南方の四尊は顰眉等の方法で、西方の四尊は蓮華光明等の方法で、北方の四尊は金剛舞の方法で画かれる。個々の特徴についてはそれぞれの心真言によって確認でき、基本的に金剛界の十六大菩薩の特色を有していることが分かる。出生段でも、観自在菩薩の心から出現した諸尊は「観自在の姿になり、蓮華に住し、蓮華の印の標幟を持ってさまざまな色や形や装飾で飾られ、如来をはじめとする薩埵の姿をした大菩薩形になって」(§1499) と説かれている。そしてこれらの変化観音は釈迦牟尼如来（毘盧遮那如来）の周囲の月輪に住する（§1500）[35]。月輪に住し、蓮華に住することは四種印智でも確認できる（§1570）。

なお世間調伏尊である世自在（lokeśvara）とは阿弥陀である世自在王（lokeśvararāja）に対応するが、王ではないから観自在菩薩である。またその尊格を説明して、「あらゆる姿を放射する」というのは、出生段において観自在菩薩が「あらゆる姿（sarvarūpa）を示現する」三摩地に入ることに対応している。すなわちこの品の転輪者である観自在菩薩は世間調伏大マンダラでは阿閦の位置に住しているのである。

次に四内供養は一切隅に画かれるとあるから、八葉蓮華の四隅の蓮弁に画かれる。四外供養は外輪の四隅、また四摂は四門に配置される。尊容の特色はそれぞれ蓮華嬉等、蓮華香等、ガナ等とあり、さらにそれぞれの心真言から確認できるように、蓮華部の性格をもつ。ガナ等とは金剛界大マンダラの出生段に見られたように四摂を指す（§178）。四門の名称は、金剛界大マンダラではそれぞれ金剛門、宝門、法門、羯磨門とあったのに対し、降三世品の教勅マンダラでは金剛門、ここでは蓮華門とある。

以上の蓮華部の変化観音は、それぞれの真言によると、金剛界大マンダラでいう金剛宝がブリクティ（bhṛkuṭi）、金剛笑が十一面（ekadaśamukha）、金剛法がターラー（tārā）、金剛語が白傘蓋（paṇḍaravāsini）、金剛業が蓮華舞自在（padmanarteśvara）、金剛鉤が馬頭（hayagrīva）、金剛索が不空羂索（amoghapāśa）等と出ている。また金剛因にはニーラカンタ（nīlakaṇṭha）、金剛語には梵天（brahma）、金剛鬘女には吉祥天（śrī）、金剛歌女には弁才天（sarasvatī）、金剛鈴にはサナトクマーラ（sanatkumāra）等と、ヒンドゥー教の諸天の名前もあげられており、これらの変化観音がそれらの特色も多いに吸収して成立していることを伺わせる[36]。

なお外輪に賢劫尊や外金剛部の諸天を配置することについては記されていない。このことは賢劫尊と外金剛部の諸天は蓮華部に含まれないことを示唆している[37]。

(2)　蓮華秘密・印マンダラ

1）• さてここで最上の〈印マンダラ〉を説明しよう。
　　金剛界のようであり、〈蓮華秘密〉と称される。

2）• 大マンダラの方法で、すべてのマンダラを線引きしなさい。

3）• その中央によき蓮華に金剛界自在［印］を画きなさい。
　　その一切方（四方）に、前のように最勝三昧耶の、
　　法金剛［印］等を、各自の明を伴って（唱えながら）画きなさい。
　　（中央五尊の真言あり。）

• 金剛歩によって、種々色（viśvarūpa）の最勝のマンダラに進み、
　　その中央に諸の蓮華に囲繞された蓮華を画きなさい。
　　その一切方（四方）に蓮華の印に住する、
　　諸の善逝我の各自の印である、諸の蓮華の標幟（padmacihna）を画きなさい。

（東方五尊の真言あり。）

- そして同様に、金剛歩によって、第二のマンダラに進み、
  頂髻（jaṭā）の中に大蓮華（ambuja）のある仏灌頂［印］（buddhābhiṣekā）を画きなさい。
  その一切方（四方）に如法に順に、
  蓮華の標幟を具えた諸の最勝三昧耶［印］を入れなさい。
  （南方五尊の真言あり。）
- そして同様に、金剛歩によって、第三のマンダラに進み、
  その中央によき蓮華に蓮華印を入れなさい。
  同様に［その］一切方（四方）に如法に順に、
  蓮華に住する諸の蓮華の標幟を具えた［印］を画きなさい。
  （西方五尊の真言あり。）
- そして金剛歩によって、第四の最上のマンダラに進み、
  火焔に満たされて光のある蓮華を蓮華の中に画きなさい。
  その一切方（四方）に如法に順に、
  蓮華の中に住する諸の蓮華の標幟を画きなさい。
  （北方五尊の真言あり。）
- そして金剛歩によって進み、諸の仏供養［印］を画きなさい。
- 蓮華鉤［印］（padmāṅkuśī）等も、要するに蓮華の標幟のある印である。
  （八供養と四摂の真言あり。）」（§§1619～1643）

1）マンダラの名称

様式の〈印マンダラ〉とは三昧耶印を主とするマンダラであることを示している。これまでは「金剛マンダラ」とあったが、意味は同じである。固有名の「蓮華秘密」も同様である。蓮華とは遍調伏品の蓮華部の性格を示す語であり、秘密とは蓮華部の陀羅尼の神格である女尊を隠して三昧耶形によって表現したものであることを示している（§1613）。

2）マンダラの形態

マンダラの形態は基本的に遍調伏大マンダラと同様であることが予想される。

3）マンダラ諸尊の配置

マンダラ諸尊の配置も遍調伏大マンダラに準ずる。出生段では、世尊と四転輪者のみ現れる（§§1613～1617）。

図絵マンダラでは、マンダラの中尊は金剛界品と同じく金剛界自在印すなわち仏塔である。それ以外もすべて三昧耶形によって画かれる。また蓮華部のマンダラの特色として、それらの三昧耶形は蓮華を強調した標幟になる。

なお月輪に住することは記されていないが、大マンダラと同様であると考えられる。また一部の諸尊の標幟であるが、それらが蓮華に住するとある。蓮華に住するのは蓮華部の特色であるが、ここでは金剛界品の三昧耶マンダラとも関連している可能性もある。金剛界品では三昧耶マンダラの特色として、蓮華に住することもあげられている（§349）。同様に火焔を有する点もあげられているが、ここでは北方輪の不空成就の位置に画かれる印に触れられているにすぎない。

(3)　法智・智マンダラ

1）•「さてここで最上の〈智マンダラ〉を説明しよう。
金剛界のようであり、〈法智〉と称される。

2）•大マンダラの方法で、すべてのマンダラを画きなさい。

3）•その中央に智金剛の中に如来（tathāgata）を画きなさい。
その一切方（四方）に儀軌通り大薩埵の、
種々自在（viśvarūpa）等を、［三摩地に］入り、心が定っているように画きなさい。
（五尊、十六尊、八供養、四摂の真言あり。）」（§§1715～1722）

1）マンダラの名称

様式の「智マンダラ」は金剛界品、降三世品では「法マンダラ」とあったが、内容は同じである。固有名の「法智」も同様で、法とは蓮華部の性格を表わし、智は金剛杵に象徴される微細な智慧を意味する。

2）マンダラの形態

マンダラの形態は基本的に遍調伏大マンダラと同様であることが予想される。

3）マンダラ諸尊の配置

マンダラ諸尊の配置に関する記述はきわめて簡略である。諸尊の構成については、五尊、十六尊、八供養、四摂の真言が説かれているから、遍調伏大マンダラに準ずると見なされる。出生段では、世尊と四転輪者のみ現れる（§§1709～1713）。

図絵マンダラでは、マンダラの中尊は微細な智慧を表わす金剛杵の中に画かれる。その他の諸尊については詳しく述べられないが、東方輪の阿閦の位置に住する種々自在以下の諸尊は禅定に入った状態に画かれるとあるから、基本的に金剛界品の法マンダラに準ずるものと見なされる。

(4)　蓮華羯磨・羯磨マンダラ

1）•「さてここで最上の〈羯磨マンダラ〉を説明しよう。
金剛界のようであり、〈蓮華羯磨〉と称される。

2）・大マンダラの方法で、すべてのマンダラを線引きしなさい。

3）・仏（buddha）の一切処に蓮華の標幟を持つすべて［の女尊］（sarvāḥ）を画きなさい。

（五尊、十六尊、八供養、四摂の真言あり。）」（§§1757～1767）

1）マンダラの名称

ここでは固有名は、蓮華が用いられ「蓮華羯磨」となっている。蓮華はもちろん蓮華部を表わす。金剛界品と同様に蓮華部の諸尊の活動としての供養を象徴したマンダラであるから「羯磨マンダラ」という。

2）マンダラの形態

マンダラの形態は基本的に遍調伏大マンダラと同様であることが予想される。

3）マンダラ諸尊の配置

マンダラ諸尊の配置に関する記述はきわめて簡略である。諸尊の構成については、五尊、十六尊、八供養、四摂の真言が説かれているから、遍調伏大マンダラに準ずると見なされる。出生段では、世尊と四転輪者のみ現れる（§1751～1755）。

マンダラ諸尊の画き方については、蓮華の標幟を持つとあるにすぎないが、金剛界品の羯磨マンダラと同タイプであるから、当然その特色が採用されるものと見なされる。[38]

(5)　四印マンダラ

1）・「さてここで最上の〈四印マンダラ〉を説明しよう。

2）・金剛界のようであり、大マンダラのようになる。

3）・印マンダラの中に仏の影像（buddhabimba）を入れなさい。

その一切方（四方）に金剛蓮華［印］等を画きなさい。」（§§1804，1805）

1）マンダラの名称

様式の「四印マンダラ」は、金剛界品と同様、中尊の周囲に四印を配置することに基づいている。ただしここには固有名は記されていない。

2）マンダラの形態

マンダラの形態は遍調伏大マンダラと同様であるということである。

3）マンダラ諸尊の配置

金剛界品同様、中央に仏、また仏の周囲には金剛蓮華印等の四印が配置される。金剛界品では各四仏の四印マンダラも画かれるとあるが(§592)、ここでは触れられていない。

(6)　遍調伏・一印マンダラ

1）・「さてここで最上の〈世間調伏マンダラ〉を説明しよう。

2）・大マンダラの方法で、外輪を画きなさい。

3）・そしてその中に同様に蓮華を画きなさい。

そこにすべての蓮華（abja）を開く種々色（viśvarūpa）を画きなさい。」（§§1820, 1821）

1）マンダラの名称

様式名については記されていないが、この偈文の後の文には「一印マンダラの方法で」（ekamudrāmaṇḍalayogena）とあるので（§1826）、項目名にはそれを採用した[39]。金剛界品では「大マンダラ」とあり、降三世品では「秘密マンダラ」とあった。「世間調伏マンダラ」とあるのは、どちらかと言えば固有名にあたるようであるが、遍調伏尊である観自在菩薩のマンダラであること、ならびに大印である尊形のマンダラであることを示している。

2）マンダラの形態

マンダラの形態は遍調伏大マンダラと同様の形態をもつことが推測される。

3）マンダラ諸尊の配置

このマンダラは外輪の中に蓮華を画き、その中に種々色すなわち遍調伏尊である観自在菩薩一尊だけを表わしたものである。

以上、遍調伏品の六種のマンダラについて概観した。ここで上記のマンダラの特色についていったん整理しておきたい。

(1) マンダラすなわち楼閣の形態は、大マンダラの記述にあるように、外郭部分は四角形で、その四方にはトーラナのある四門（入口）がある。内側は第一の四角形を画いたうえにさらに第二の四角形を90度転じて重ね、各四隅を蓮弁のようにし、八柱と同意趣で八葉蓮華の形に画かれる。

(2) 遍調伏品の大・三・法・羯という四種の広大なマンダラに配置される諸尊の構成は、基本的に金剛界品と同様であるが、蓮華部の変化観音によって構成されていることから、阿閦の位置に遍調伏尊である観自在菩薩が配置されるなど、四仏に相当する尊格も観自在菩薩ならびにその変化尊になる。なお外輪には金剛界品の賢劫尊、降三世品の外金剛部の諸天を配置するという記述はない。このことは賢劫尊や外金剛部の諸天は蓮華部に含まれないことを示している。

(3) これらのマンダラ諸尊の配置順は、大・三昧耶の二マンダラによれば、中央の輪壇から東・南・西・北の輪壇へ順に進む。

(4) 四仏の名は降三世品と同様に遍調伏品でも現れない。代わって四転輪者が現れる。

(5) 諸尊の画き方は観自在の相にし、蓮華を強調した標幟を持つとするなど以外、六種マンダラの表現は基本的に金剛界品と同様である。また三昧耶マンダラでも中尊の位置に仏塔を置く。

(6)　また金剛界品の月輪、降三世品の火焔に対して、遍調伏品では蓮華に住するのが基本である。諸尊が月輪に住することは大マンダラに見えるから共通している。三昧耶マンダラでは、一部の諸尊に蓮華に住する記述が見られるが、これは蓮華部の要素であるとともに、金剛界品の三昧耶マンダラの要素とも関係する可能性もある。さらに一例火焔に触れられているが、詳細は不明である。

［D－1］一切義成就品のマンダラ

一切義成就品に現れる諸尊は、部族で言えば摩尼部に所属する[40]。それゆえ一切義成就品のマンダラは摩尼部のマンダラといってもよいであろう。一切義成就品では一切義成就尊である虚空蔵菩薩をはじめとする虚空蔵の変化尊によって組織されているのが特色である。これら摩尼部のマンダラとして、ここには大・三昧耶・法・羯磨・四印・一印の六種マンダラが説かれている。以下、各図絵マンダラの偈文について確認したい。

(1)　一切義成就・大マンダラ

1）・「さてここで最上の〈大マンダラ〉を説明しよう。
　　金剛界のようであり、〈一切成就〉と称される。

2）・四角形にして、四門あり、四つのトーラナによって飾られ、
　　四本の線で結ばれ、繒帛と華鬘で飾られる。
　　すべてのマンダラの隅（四隅）と門扉のところに
　　金剛宝をちりばめて、外輪を線引きしなさい。
　・その［外輪の］内側に金剛宝からなる宮殿（pura）をつくりなさい。
　　八柱の方法で、そこに線を引きなさい。
　　五つのマンダラ（五輪壇）を荘厳し、種々の宝光によって輝く。

3）・そこに自の印（四印）に囲繞された仏（buddha）を入れなさい。
　　（中央五尊の真言あり。）
　・そして金剛歩によって、一切願成就（sarvāśāsiddhi）のマンダラに進み、
　　そこに住する宝与願の金剛蔵（vajragarbha）を画きなさい。
　　その一切方（四方）に宝の印をそなえた、
　　諸の大薩埵を如法に順に画きなさい。
　　（東方五尊の真言あり。）
　・そして金剛歩によって、宝鬘（ratnamāla）のマンダラに進み、
　　そこに中央に正しく最勝の宝鬘を持つものを画きなさい。
　　その一切方（四方）に如法に順に、
　　手に最勝の摩尼の標幟を有する諸の大薩埵を画きなさい。

（南方五尊の真言あり。）

- そして金剛歩によって、宝蓮華（ratnapadma）のマンダラに進み、
そこに住する宝蓮華を持つ主（vibhu）を画きなさい。
その一切方（四方）に諸の大薩埵を画きなさい、
要するに摩尼の標幟を有するものたちを如法に順に。

（西方五尊の真言あり。）

- そして金剛歩によって、宝雨（ratnavṛṣṭi）のマンダラに進み、
そこに宝雨を降らす大薩埵を画きなさい。
その一切方（四方）に儀軌どおり諸の大薩埵を［画きなさい］、
要するに宝の標幟をそなえ、手に印を有するものたちを。

（北方五尊の真言あり。）

- そして金剛歩によって、すべての隅のところに（四隅）に進み、
宝嬉（ratnalāsyā）等を如法に順に画きなさい。

（四内供養の真言あり。）

- 金剛歩によって、最上の外輪に進み、
外輪の諸隅に香（dhūpā）等を画きなさい。

（四外供養の真言あり。）

- 四門の中に諸の門衛（dvārapāla）をつくりなさい。

（四摂の真言あり。）」（§§1863～1890）

1）マンダラの名称

様式の「大マンダラ」は、このマンダラが大印すなわち尊形によって表わされることによる。「金剛界のようであり」というのは、このマンダラもスメール山頂で展開された金剛界如来のマンダラに基づくものであり、それと相似なるものであるからである。固有名の「一切成就」（sarvasiddhi）とは、この場合「一切義成就」の略称であり、もちろんこのマンダラの性格を示すものであるが、一切義成就尊である虚空蔵菩薩を中心とするマンダラであることを表明している。

2）マンダラの形態

マンダラの形態は大マンダラが基本となる。それゆえ具体的な記述がある。前半の文はマンダラの外輪の説明である。金剛界大マンダラ、降三世大マンダラ、遍調伏大マンダラとほぼ同文であり、内容も同じである。

後半の文は外輪の内側の説明である。マンダラの内側には金剛宝からなる宮殿が形成され、八柱と同様の意趣で、種々の宝光が輝くように画かれるのである。そしてその中に五つのマンダラ（五輪壇）が荘厳される。

3）マンダラ諸尊の配置

マンダラ諸尊の位置関係は金剛界大マンダラから予想される。ただしこのマンダラでも、降三世大マンダラや遍調伏マンダラと同様に、中央から東・南・西・北の輪壇に進み、四内供養、四外供養、四摂の順で配置される。尊格の性格は異なるが、基本的には金剛界三十七尊と同様の諸尊によって構成される。出生段には世尊と金剛手以下の四転輪者が現れ（§§1851～1855）、さらに虚空蔵菩薩の心から虚空蔵の諸多の変化尊が出現するが（§§1856～1861）、個々の諸尊については詳しく述べられていない。

図絵マンダラでは、マンダラの中央に仏を配置する（§）。基本的に毘盧遮那如来である。その仏の四方には四波羅蜜に相当する四種の三昧耶形が画かれる。

四方の輪壇の中央にはそれぞれ一切願成就、宝髪、宝蓮華、宝雨が位置する。そしてその周囲にそれぞれ四尊づつ虚空蔵の変化尊が画かれる。このように四方の四仏の位置にも、摩尼部の性格をもつ尊格が配置される。これら四大薩埵の尊容の特色は上記のとおりである。またその周囲に配置される十六の虚空蔵の変化尊はいずれも摩尼あるいは宝の標幟を持つ。個々の特徴についてはそれぞれの心真言によって確認でき、基本的に金剛界の十六大菩薩の特色を有していることが分かる。出生段でも、虚空蔵菩薩の心から出現した諸尊は「あまねく光線と光焔を蔵し、金剛摩尼宝灌頂等のさまざまな装身具で飾られた身を有し、大金剛摩尼宝の標幟の印を手に持った大菩薩身となって」（§1859）と説かれている。そしてこれらの変化尊は毘盧遮那如来の周囲の月輪に住する（§1860）。月輪に住することは四種印智でも確認できる（§1924）。

なお一切願成就（sarvāśāsiddhi）とは一切義成就（sarvārthasiddhi）と同義であり、金剛蔵とは虚空蔵菩薩の灌頂名である。すなわちこの品の転輪者である虚空蔵菩薩は阿閦の位置に住するのである。

次に四内供養はそれらの四隅に画かれる。四外供養は外輪の四隅、また四摂は四門に配置される。尊容の特色はそれぞれ宝嬉女等、香女等、門衛とあり、さらにそれぞれの心真言から確認できるように、摩尼部の性格をもつ。

なお外輪に賢劫尊や外金剛部の諸天を配置することについては記されていない。このことは賢劫尊と外金剛部の諸天は摩尼部に含まれないことを示唆している。[41]

(2)　宝秘密・印マンダラ

1）・「さてここで最上の〈印マンダラ〉を説明しよう。
　　金剛界のようであり、〈宝秘密〉と称される。

2）・大マンダラの方法で、すべてのマンダラを線引きしなさい。

3）・その中に規程どおり仏の印（buddhamudrā）を画きなさい。
　　座（paryaṅka）に住する最初の摩尼を金剛界［如来］の前に画きなさい。

［同様に］摩尼鬘と、蓮華の中に摩尼と、摩尼に囲繞された摩尼を。

（中央五尊の真言あり。）

• 金剛歩によって、一切成就（sarvasiddhi）のマンダラに進み、
金剛宝の中に大宝摩尼を画きなさい。
その一切方（四方）に摩尼の付いた各自の印を、
宝阿闍梨は如法に順に画きなさい。

（東方五尊の真言あり。）

• そして金剛歩によって、第二のマンダラに進み、
その中央に二眼をそなえた摩尼を画きなさい。
その一切方（四方）に如法に順に
摩尼の標幟をそなえた各自の印を画きなさい。

（南方五尊の真言あり。）

• そして金剛歩によって、［同様に第三のマンダラに］進み、
［その中央に］摩尼の蓮華を画きなさい。
その一切方（四方）に如法に順に
［摩尼の標幟をそなえた各自の印を画きなさい。］

（西方五尊の真言あり。）

• 金剛歩によって、第四の最上マンダラに進み、
そこで宝雨によって住し、宝をそなえた金剛を、
如法に羯磨印に囲繞されるように画きなさい、
摩尼の標幟の方法で如法に順に。

（北方五尊の真言あり。）」（§§1968～1986）

1）マンダラの名称

様式の「印マンダラ」とは遍調伏品と同様、このマンダラが三昧耶マンダラであることを示している。固有名の「宝秘密」（ratnaguhya）も同様である。宝とは摩尼部の性格を示す語であり、秘密とは宝部の陀羅尼の神格である女尊を隠して三昧耶形によって表現したものであることを示している（§1962）。

2）マンダラの形態

マンダラの形態は基本的には一切義成就大マンダラと同様であることが予想される。

3）マンダラ諸尊の配置

マンダラ諸尊の配置も、四内供養以下について述べられていないが、一切義成就大マンダラに準ずると見られる。出生段では、世尊と四転輪者のみが現れる（§§1962～1966）。

図絵マンダラでは、中央に仏の印が配置される。仏の印とは、三昧耶形のように理解されるが、Ānandagarbha は毘盧遮那如来の大印とする[42]。それ以外は基本的に三昧耶形

によって画かれる。

なお金剛界品の三昧耶マンダラと同様、ここでもこれらの三昧耶形は座（paryaṅka）に住することが述べられている。

(3)　宝智・智マンダラ

1）•「さてここで最上の〈智マンダラ〉を説明しよう。
　　金剛界のようであり、〈宝智〉と称される。

2）•大マンダラの方法で、すべてのマンダラを線引きしなさい。

3）•法マンダラの方法で、胸に標幟を画きなさい。
　　（四方二十尊の真言あり。）」（§§2044～2049）

1）マンダラの名称

遍調伏品と同様、様式名は「智マンダラ」とあるが、本文の3）には法マンダラであることが述べられている。固有名の「宝智」（ratanajñāna）の宝は摩尼部の性格を表わし、智は金剛杵に象徴される微細な智慧を意味する。

2）マンダラの形態

マンダラの形態は基本的に一切義成就大マンダラと同様であることが予想される。

3）マンダラ諸尊の配置

マンダラ諸尊の配置に関する記述はきわめて簡略である。また諸尊の構成は四方の二十尊の真言が見えるから、一切義成就大マンダラに準ずるものと見なされる。出生段には、世尊と四転輪者のみが現れる（§§2038～2042）。

マンダラ諸尊の画き方は、胸のところに標幟が画かれるとあるにすぎないが、基本的に金剛界品の法マンダラに準ずるものと見なされる。

(4)　宝羯磨・羯磨マンダラ

1）•「さてここで最上の〈羯磨マンダラ〉を説明しよう。
　　金剛界のようであり、〈宝羯磨〉と称される。

2）•大マンダラの方法で、すべてのマンダラを線引きしなさい。

3）•その中央に規程どおり仏の影像（buddhabimba）を入れなさい。
　　大薩埵の方法で、諸の宝薩埵女（ratnasatvi）を画きなさい。
　　（仏、四方の二十尊、八供養、四摂の真言あり。）」（§§2087～2097）

1）マンダラの名称

ここでは固有名は、宝が用いられ「宝羯磨」（ratnakarma）となっている。宝はもちろん摩尼部の性格を表わす。金剛界品と同様に摩尼部の諸尊の活動としての供養を象徴したマンダラであるから「羯磨マンダラ」という。

2）マンダラの形態

マンダラの形態は基本的に一切義成就大マンダラと同様であることが予想される。

3）マンダラ諸尊の配置

マンダラ諸尊の配置に関する記述はきわめて簡略である。諸尊の構成については、五尊、十六尊、八供養、四摂の真言が説かれているから、一切義成就大マンダラに準ずる。出生段では、世尊と四転輪者のみ現れる（§§2081～2085）。

マンダラ諸尊の画き方については、中央に仏の影像（仏形）を配置し、大薩埵の方法で宝薩埵女等を画くとある。「大薩埵の方法で」とは大印すなわち尊形を意味するが、これらは他の品と同様、十六尊以下の尊格が女性尊になることを示している[43]。金剛界品の羯磨マンダラと同タイプのものであるから、当然その特色が採用されるであろう。

(5) 四印マンダラ

1）•「さてここで最上の〈印マンダラ〉を説明しよう。

2）•四印の方法で、マンダラを分別しなさい。」（§2116）

1）マンダラの名称

様式の「印マンダラ」は、遍調伏品とこの品の三昧耶マンダラにも用いられているように、主として三昧耶印によって表されるマンダラに用いられている。ただしここでは、偈文に先立つ用例にしたがって四印マンダラという語が略されたものと考える（§2115）。なお遍調伏品と同様、マンダラの固有名は説かれていない。

2）マンダラの形態

マンダラの形態に関しては上記のような説明があるだけである。

3）マンダラ諸尊の配置

マンダラ諸尊の配置に関する記述は2）のマンダラの形態の文に含まれ省略されている。金剛界品同様、中央に仏、また仏の周囲には四印が配置されると予想される。金剛界品では各四仏の四印マンダラも画かれるとあるが（§592）、ここでは触れられていない。

(6) 大マンダラ

1）•「さてここで最上の〈大マンダラ〉を説明しよう。

3）•如法に一切成就のマンダラを画きなさい。」（§2124）

1）マンダラの名称

様式は一般にいう一印マンダラである。金剛界品と同様ここでも「大マンダラ」とある。なおマンダラの固有名は説かれていないようであるが、偈文の2）の「一切［義］成就」がそれに相当すると見なすこともできる。ただしその場合、先の大マンダラと全く同名になる。

2）マンダラの形態

マンダラの形態については省略されている。

3）マンダラ諸尊の配置

このマンダラは、一切義成就大マンダラにおける同尊だけを表わしたものである。

以上、一切義成就品の六種のマンダラについて概観した。ここで上記のマンダラの特色についていったん整理しておきたい。

(1) マンダラすなわち楼閣の形態は、大マンダラの記述にあるように、外郭部分は四角形で、その四方にはトーラナのある四門（入口）がある。内側は金剛宝から成り、八柱と同意趣で宝光の輝く形態になる。

(2) 一切義成就品の大・三・法・羯という四種の広大なマンダラに配置される諸尊の構成は基本的に金剛界品と同様であるが、摩尼部の虚空蔵の変化尊によって構成されていることから、阿閦の位置に一切義成就尊である虚空蔵が配置されるなど、四仏に相当する尊格も虚空蔵ならびにその変化尊になる。なお外輪には金剛界品の賢劫尊、降三世品の外金剛部の諸天は配置するという記述はない。このことは賢劫尊や外金剛部の諸天は蓮華部に含まれないことを示している。

(3) これらのマンダラ諸尊の配置順は、大・三昧耶の二マンダラによれば、中央の輪壇から東・南・西・北の輪壇へ順に進む。

(4) 四仏の名は降三世品と同様に遍調伏品でも現れない。代わって四転輪者が現れる。

(5) 諸尊の画き方は虚空蔵の相にし、摩尼や宝を強調した標幟を持つとする以外、六種マンダラの表現は基本的に金剛界品と同様である。ただし三昧耶マンダラでは中尊の位置に仏の印を置くとある。これについては、降三世品と同様に、仏塔ではなく大印とする解釈がある。

(6) また金剛界品の月輪、降三世品の火焔、遍調伏品の蓮華に対して、遍調伏品では摩尼あるいは宝が付加要素になる。諸尊が月輪に住することは大マンダラに見えるから共通している。また三昧耶マンダラでは金剛界品と同様、諸尊の印は座（paryaṅka）に住するという記述がある。

Ⅳ．むすび

以上、『真実摂経』に説かれる28種のマンダラについて検討した。そこで最後に、四大品のマンダラの特色について簡単に整理してまとめとしたい。[44)]

『真実摂経』所説のマンダラは金剛界品の六種マンダラが基本になっている。したがって降三世品以下のマンダラも、金剛界品のマンダラを基準にして構成されている。しかしその一方で、各四大品はそれぞれ独自の特色も有している。その重要なポイントは部

族別に構成されているところにある。四大品と部族の関係は、金剛界品が如来部、降三世品が金剛部、遍調伏品が蓮華部、一切義成就品が摩尼部となり、各四大品マンダラは各部族に所属する諸尊から組織されている。このように各四大品は部族を異にすることから、マンダラの形態や諸尊の構成もそれぞれ個性化されている。例えば、マンダラの形態は外輪が四角形である点では何れも共通するものの、その内側はそれぞれの部族の個性が強調され、金剛界品は円形、降三世品は四角形、遍調伏品は八葉蓮華形、一切義成就品は宝光の輝く形に画かれる。ただし降三世品の教勅マンダラは多重の同心円状あるいは同心方状になる。

また諸尊の構成は金剛界三十七尊を基本にしているが、金剛界品が大乗の主要な仏、菩薩から成っているのに対し、降三世品は忿怒の金剛手（降三世、金剛吽迦羅）を中心とする忿怒尊、遍調伏品は観自在菩薩を中心とする変化観音、一切義成就品は虚空蔵菩薩を中心とする虚空蔵の変化尊から構成されている。その中、毘盧遮那如来は教主であることから各部族のマンダラの中尊に位置するが、阿閦等の四仏は降三世以下には直接現れない。代わって四転輪者（四大薩埵）が現れる。このことは四仏は如来部に所属することを示している。後に四仏は金剛部等の部主と解釈されるようになるが、『真実摂経』の段階ではまだそこまで至っていない。また諸尊の構成に関して、金剛界品では弥勒等の賢劫尊、降三世品では外金剛部の諸天が加えられている。これもそれぞれの部族に関係しているといってよい。降三世品の教勅マンダラは仏頂尊系のもので、外金剛部の諸天が主要な位置を占め、降三世品の根本のマンダラとは少し構成が異なる。

このように四大品のマンダラには部族という枠組みが強く働いているのが特色である。『真実摂経』所説のマンダラについては、これまで我が国に伝承されている遺品との関係から、その一部についてのみ取り上げられることが多く、そのため四大品全体のマンダラの全貌は必ずしも明らかにされてこなかった。しかしこれらの遺品をより正確に位置づけるためにも、まず基本となる『真実摂経』の四大品全体のマンダラを解明することが重要である。本稿ではマンダラの形態と諸尊の構成概要にしぼって考察したため、マンダラを構成する個々の諸尊の特色については詳しく検討することができなかった。これについては後日に譲りたい。

註

1）　本文ならびに註にある§の数字は、堀内校訂梵本の文段番号を指す。

2）『十八会指帰』には、それぞれ教勅大曼荼羅、教勅三昧耶曼荼羅、教勅法曼荼羅、教勅羯磨曼荼羅としている。本経には、教勅マンダラという言葉そのものは現れないが、降三世品には「教勅」あるいは「教令」などと訳される ājñā という語が頻出する。降三世大マン

ダラ儀軌には、忿怒の金剛手は「一切如来の主であり、一切如来の父であり、一切如来の教勅に従うものであり（sarvatathāgatājñākara）、一切如来の長子である世尊普賢菩薩摩訶薩は、すべての有情を調伏することをなすことから、大忿怒王位に灌頂された」（§691）とある。教勅マンダラは一切如来の教勅の実行者（教令輪者）である忿怒の金剛手によって教化され仏教に帰依するにいたった外教の神々を中心とするマンダラである。

3）　三世輪（trilokacakra）とは、詳しくは「全三界の三世輪」（sakalatraidhātukatrilokacakra）という（§665）。

4）　cf. Śākyamitra, *Kosalālaṅkāla*, Toh no.2503, Ri fol. 11b, etc. ; Ānandagarbha, *Tattvālokakarī*, Toh no.2510, Li fol. 327b, etc.

5）　『十八会指帰』には「此中に大仏頂および光聚仏頂の真言および契を説けり。また一字頂輪法に通ず」とある（大正18巻、869番、285頁中）。ここで言う大仏頂の真言と印契は本経の§§1225，1305に、また光聚仏頂の真言と印契は§§1227，1306に相当しよう。

6）　堀内校訂梵本に指摘されているように、サンスクリット写本は「第二のマンダラ」、チベット訳と漢訳は「第一のマンダラ」とある。ここでは前者を採用した。詳しくは、堀内校訂梵本註(1)の下巻、p.533を参照。

7）　遍調伏品と一切義成就品に説かれる四印マンダラと一印マンダラには、固有名と様式名のどちらか一方が記されていないものもある。

8）　遍調伏品と一切義成就品に説かれる四印マンダラと一印マンダラには、「金剛界のようであり」という定型句が記されていないものもある。

9）　註5)の『十八会指帰』に「一字頂輪法に通ず」とあるように、法輪は一字金輪をはじめとして仏頂尊との関係が深い。なお酒井真典博士によって指摘されているように、法輪形のマンダラは『降三世軌』をはじめ、『悪趣清浄軌』、『吉祥最勝本初軌』、『金剛道場荘厳軌』においても説かれている。cf. 酒井真典「八輻輪曼荼羅」（『酒井真典著作集　第三巻　金剛頂経研究』法蔵館、1985）。

10）　金剛界大マンダラ儀軌である *Vajrodaya*（Toh no.2516）や、降三世大マンダラ儀軌である *Trailokyavijayodaya*（Toh no.2519）には、この要素が組み込まれている。

11）　ここでは心真言の本文に「一切知（普明）よ」（sarvavit）とあるのが注目される（§1273）。周知のように、『悪趣清浄軌』の旧訳（Toh no.483）には、一切知毘盧遮那（四面、定印）が現れる。

12）　出生段には、世尊毘盧遮那如来が如来仏頂（tathāgatoṣnīṣa）の真言を唱えると、一切如来の如来仏頂から光線が現れ一切世間界を照らして後、金剛手の頂髻（cūḍa）の中に如来仏頂の有様で住したとある（§§1225，1226）。

13）　図絵マンダラの本文では、これら五類諸天の配置に関して、飛行天以下にはそれぞれ「第二マンダラ」等とある。ただし三界主には「第一のマンダラに」という語はない。文中の「第二のマンダラ」とあるのは、マンダラの第二重を指すものと見られるから、位置については省略されているものと考える。従ってマンダラの第二重における「第二のマンダラ」等は、降三世品のマンダラにあったように、四方のマンダラを意味する。また註6)を参照。

14）　ただしマンダラの第二重の四方にマンダラがあると言っても、この場合は四方に各グルー

プの諸天を含む円形の輪壇があるというわけではないようである。ギャンツェに残る遺品ではこれらの諸天は中心に向かって横列に巡らされている。もちろん第三重も同様になっている。なお現図九会マンダラにおける那羅延天等の外金剛部二十天の配置法は、この教勅マンダラに典拠がある。

15) Āndagarbha は金剛手の足下に大自在天と烏摩妃を画くとする（Toh no.2510, Li fol.328b）。Śākyamitra は降三世をなしつつ住するとするのみである（Toh no.2503, Ri fol.6a）。これによると、図絵マンダラの本文にある「降三世［の相］をなしつつ」とあるのは足下に大自在天と烏摩妃を踏みつけること、すなわち三世輪の首領である大自在天を降伏すること（降三世）を意味しよう。

16) Śākyamitra は尊形とする（Toh no.2503, Ri fol. 11b）。

17) cf. *Kosalālaṅkāra*, Toh no.2503, Ri fol.12a; *Tattvālokakarī*, Toh no.2510, Li fol.339a.

18) Ānandagarbha は金剛杵の左右の両側とする（Toh no.2510, Li fol. 339a）。なおギャンツェの遺品はこれにしたがって、金剛杵の左右に二印づつ横に並べている。

19) 註釈では、虚空天の前二天を内側の東門に、後二天を外側の北門に分けて画く。cf.*Kosalālaṅkāra*, Toh no.2503, Ri fol.12a; *Tattvālokakarī*, Toh no.2510, Li fol.339a. なお Śākyamitra はそれぞれの二天を一身形にするとしている。ギャンツェの遺品には東門と北門に二尊づつ画かれている。

20) Śākyamitra は前文とつなげて解釈しているように見られる。ただしその場合も尊形とする（Toh no.2503, Ri fol.12a）。Ānandagarbha は前文と後文を分け、前文では四天女を内側の四隅に尊形で画き、外側（外輪）の四隅に三昧耶形を画く（Toh no.2510, Li fol.339a）。ギャンツェの遺品は後者の説にしたがっている。

21) Ānandagarbha は教勅の大マンダラの場合にも四天女を加えている（Toh no.2510, Li fol.329a）。また Śākyamitra と Ānandagarbha は降三世大マンダラ等でも四天女を外輪に加えている。cf.*Kosalālaṅkāra*, Toh no.2503, Yi fol.205b; *Tattvālokakarī*, Toh no.2510, Li fol.259b etc.

栂尾祥雲著『曼荼羅の研究』（p.345）では四天女（四明妃）の尊名をチベット語から bhairavā, śrī, sarasvatī,gaurī と還梵されているが、bhairavā はbhīmā の、gaurī は durgā の誤りである。いずれにしても古来不詳とされてきた現図九会マンダラの四隅に画かれる四明妃の典拠は教勅の三昧耶マンダラにある。八十一尊マンダラの四明王の典拠は不明。

22) cf.Toh no.2510, Li fol.339b.

23) Ānandagarbha は仏の前方の金剛手の印は、三叉戟を金剛杵で圧したものとしている（Toh no.2510, Li fol.339a）。この三叉戟が金剛最上明の印である。これは前の降三世品の三昧耶マンダラに説かれている印に対応する（§999）。

24) 堀内校訂梵本に指摘されているように、チベット訳、ならびに註釈では「大三昧耶マンダラ」とあり、また漢訳は「大法三昧耶マンダラ」とある。ここでは、サンスクリット写本にしたがって「大マンダラ」のままにしたが、大マンダラでは紛らわしいので、堀内校訂梵本したがって、項目名には「大三昧耶マンダラ」とした。何れにしても決着しがたい。

25) Ānandagarbha は二重の同心円にする（Toh no.2510, Li fols.346b, 347a）。ギャンツェの

遺品はこれにしたがっている。

26)　Ānandagarbha は、内側の初重に仏、四大薩埵、金剛最上明（金剛手の足下近くの前方）、ならびに四摂（四門）を画き、外輪に幻化金剛等の五類の諸天（虚空天は四門）を画くとする（Toh no.2510, Li fols.346b, 347a）。なお金剛最上明に関して、Śākyamitra は金剛手の足下で禅定に入っているとする（Toh no.2503, Ri fol.15a）。ギャンツェの遺品は、金剛手の足下近くの前方で禅定に入っている。

27)　Śākyamitra は、金剛マンダラとは外輪を降三世マンダラのように線引きすることであり、本文の3）に諸の天女を輪のマンダラの方法で画くとあるのは法輪であるとする（Toh no.2503, Ri fols.18b, 19a）。Ānandagarbha は三昧耶マンダラと同様とし（Toh no.2510, Śi fol.3a）、ギャンツェの遺品も後者の説にしたがっている。

28)　Śākyamitra は単に菩薩としている（Toh no.2503, Ri fol.18b）。Ānandagarbha は忿怒金剛薩埵から忿怒金剛拳までの十六忿怒とする（Toh no.2510, Śi fol.3a）。

29)　降三世品では四内供養は舞供養の性格を持つ。cf.拙稿「『初会金剛頂経』所説のマンダラについて（前）」（『密教文化研究所紀要』9, p.142）

30)　Ānandagarbhaは金剛シャウンダ女（rdo rje glaṅ sna ma）と鬘女（phreṅ ba ma）を東門に、金剛愛（rdo rje dbaṅ）と最勝金剛（rnam par rgyal baḥi rdo rje）を北門に配する（Toh no.2510, Śi fol.3b）。この場合のチベット訳の尊名は四虚空天の名称に従っているが、その直後の文では、マンダラ諸尊の配置を説明して、諸天妃は四類諸天妃を四方にめぐらし、四虚空天妃を二尊ずつ東門と北門に分けて配するように説明している（fol.5a）。ギャンツェの遺品は後文の説にしたがっているようである。Śākyamitra は、諸門に金剛鉤等を配するから（Toh no.2503, Ri fol.19b）、四門を意味しているかも知れない。

31)　ギャンツェの遺品では降三世大マンダラと羯磨マンダラはともに展左で、おもに右手を振り上げており、よく似ていて区別しがたい。

32)　すでに指摘したように、金剛界品以外では四仏に代わって四転輪者が現れる。このことは阿閦等の四仏は金剛界の十六尊と同様、基本的に如来部に所属していることを示している、ただし毘盧遮那如来は本経の教主であるから、四大品を通じて現れる。

33)　四種印智のところでは、「無量寿」（amitāyu）という語が現れる（§1571）。五部族の思想では無量寿仏は蓮華部の部主になるが、その萌芽のあることは認められる。

34)　前の論文の註19）では、金剛界品の三昧耶マンダラにおける五仏の印が蓮華座と光輪を有するという特色に関連して、「Abhayākaragupta の *Niṣpannayogāvalī*では大マンダラのすべての諸尊に採用している」と指摘した（拙稿「『初会金剛頂経』所説のマンダラについて（前）」p.135）。

ただし正確には、五輪壇に対応して五つの蓮華が画かれ、各蓮華の中央（karṇikā, puṣkara, varāṭaka）に五仏がそれぞれ住し、その四方の蓮弁（dala）に四波羅蜜ならびに各四親近が住するような形態になっている。これは *Vajrāvalī* の三昧耶マンダラでも同様である。本経の遍調伏品では、仏は中尊のみであるため、マンダラの内側には五輪壇に対応して五つの蓮華を画かない。中央を花蘂（keśara）とし、四方輪を四方の蓮弁にして、中尊の仏から四内供養までを大きな八葉蓮華の上におく。このような相違があるけれども、

Niṣpannayogāvalī の金剛界大マンダラ等に説かれるマンダラのイメージには遍調伏品のマンダラと重なるものがある。*Niṣpannayogāvalī* については、立川武蔵「『完成せるヨーガの環』第19章「金剛界のマンダラ」訳註」（『密教図像』14）を参照。

35）本経における釈迦如来の位置については、堀内寛仁「初会金剛頂経の釈尊観」（『日本仏教学会年報』50）を参照。

36）既存の尊格を取り入れているという点は、金剛界品が大乗の主要な仏、菩薩、陀羅尼を吸収していることを除いて、とくに遍調伏品の顕著な特色になっている。蓮華舞自在は本経以前に成立していたものかどうか不明であるが、『サマーヨーガタントラ』にいたって蓮華部（蓮華舞自在族）を代表する尊格名になる。

37）Ānandagarbha は外輪に賢劫尊を配置する解釈を示す（Toh no.2510, Śi fol.32a）。

38）偈文の「すべて［の女尊］」（sarvāḥ）の語は女性形であるが、金剛界品の羯磨マンダラにあった「女尊」（devatā）に対応する（§520）。降三世品では「薩埵金剛女」（sattvavajrī）になっている（§1133）。なお女性尊になるのは、金剛界品、降三世品と同様、十六尊以下の尊格である。

39）堀内校訂梵本に指摘されているように、サンスクリット写本には mudrā は欠けているが、チベット訳、漢訳では「一印マンダラ」とある。なお Ānandagarbha も同様である（Toh no.2510, Śi fol.90a）。Śākyamitra は ekamudrāyogena と引用するが、解説では「一印マンダラの方法で」とする（Toh no.2503, Ri fol.61ab）。

40）本経では部族名を宝部とは記されない。用例は摩尼部とするのみである。五部族が成立した『金剛頂タントラ』では宝部となっている。

41）Ānandagarbha は外輪に賢劫尊を配置する解釈を示す（Toh no.2510, Śi fol.109b）。

42）cf.Toh no.2510, si 132b. なおギャンツェの遺品は Ānandagarbha 説にしたがっている。

43）註38）を参照。

44）詳しくは、拙稿「『初会金剛頂経』の四大品とマンダラの特色」（『高野山大学創立百十周年記念　高野山大学論文集』）にゆずる。

本稿は平成８年度文部省科学研究費補助金（基盤研究(C)(2)）による研究成果の一部である。

〈キーワード〉『真実摂経』、金剛界マンダラ、マンダラ

追記

本誌の前号で、「ただし本経では、この尊格を指す場合はもっぱら金剛手（vajrapāṇi）という名称が用いられており、金剛薩埵と同様に、金剛吽迦羅と降三世はこの尊格を示す固有名詞として用いられているようである」（『密教文化研究所紀要』９、p.146, 3-5行）としましたが、末文は「用いられていないようである」の誤植です。